津沢夜高あんどん考察

～会館建設を契機に、津沢夜高あんどんの魅力を探る～

富山県小矢部市　脊戸 栄

序章

祭りとは、感謝や祈り、慰霊のために神仏及び祖先を祭る行為（儀式）である。また、時代の流れともに徐々に様式を改め、地域ごとにそれぞれ独自に発展し、受け継がれ、今日も全国津々浦々で行われている。まちづくりにおいて、地域住民が地域社会や地域共同体の担い手・構成要素となることで成り立つものであり、この意味において、祭りは、まちづくりの重要な一要素である。普段は、別々の生活を営んでいる人々が、非日常（ハレ）である祭りのために集まり、協力し、団結する。そして、祭りが終わると再び、それぞれの日常（ケ）に戻っていく。地域社会の人々のこのような活動が、長い年月を積み重ねて、存続している。祭りは、集団儀礼であり、祭りを執り行う地域社会の人々と密接な繋がりを持つものである。

平成 28 年 12 月 1 日に地域社会の安泰や災厄防除を願い、地域の人々が一体となり執り行う「山・鉾・屋台」の巡行を中心とした祭礼行事 33 件が「ユネスコ無形文化遺産」に登録された。私が住む富山県でも高岡市の御車山、魚津市のタテモン、南砺市城端の曳山が選ばれたことは嬉しくもあり、大変誇りでもある。さらに、12 月 14 日に富山県の「まちの未来創造事業[注1]」に津沢夜高あんどん会館建設事業が補助対象事業と認定された。

本論文では、「祭り」と、それを執り行っている地域社会との関わり、すなわち、地域社会の人々にとって「祭り」とは何であるのか、また、あんどん会館建設事業が進む今、どのようなあんどん会館が求められるのかを、地区住民に聞き取りをし、それを中心に考察していく。

第１章　夜高あんどんとは

第１節　名前の由来

全国の山車・曳山・屋台の数は 150 を超え、富山県にも 20 もの山車等が存在する。そのうち、津沢夜高あんどん及びその近隣地区の状況を表１にまとめた。夜高の意味は、「夜高くかかげるもの」で、電線が張り巡らされる以前は、高さが 11mもあり、その姿が街並みの屋根越しに見ることができたの

津沢夜高あんどん祭り	福野夜高祭	砺波夜高祭り	庄川観光祭
小矢部市津沢地区	南砺市福野地区	砺波市出町地区	砺波市庄川地区
６月第１金、土曜日	５月１、２日	６月第２金、土曜日	６月第１土、日曜日
１２町内：２０基	７町内：２３基	２０町内：２１基	２０町内：２６基
田祭り：休んごと	春季祭礼（福野神明宮）	田祭り：休んごと	田祭り：休んごと
とやまの文化財百選	富山県無形文化財 とやまの文化財百選	とやまの文化財百選	とやまの文化財百選
福野から伝承	１６５２年(慶安５年)	福野から伝承	福野から伝承
けんかあんどん	引き合い	突き合わせ	合わせ
昭和52年沼田町に伝承	昭和47年東京銀座祭り 平成元年京都・神戸 平成23年リヨン 平成25年相馬野馬追参加		庄川峡花火大会

表１　近隣の夜高あんどんまつり

で、それが夜高の語源となったと言われている。祭りの起源は、隣接する福野町（現南砺市）が 1652 年（慶安２年）の町立の後、勧請した伊勢神宮の御分霊が町に着く前に日が暮れてしまい、町の人々が行燈を手にして迎えに出たことであると伝えられている。また、農民が田植え終了後の植付け盆（休んごと）で使われた箱型の連楽行燈であると言われ、農耕行事の一つとしても認識されている。それが次第に大型化し、豪華絢爛になったものが現在の夜高あんどんである。（雑考 PP7 記載、小矢部市史 PP402 記載、清水村史 PP231 記載）

第２節　製作工程

津沢地区の夜高あんどんの製作は、例年、雪解けがまだ始まらない３月から行われる。12 の地区では、それぞれの作業場（町部は複数箇所あり、村部は１か所である。）で、煌びやかな装飾部門の山車、ザブトン、ツリモンを、①竹細工・電気配線、②紙張り・下書き、③蝋引き、④彩色（紅入れ）をして完成させる。

また、台締めと呼ばれる動力部分の台に関する作業を 20 人ほどで行う。次節で詳述する「裁許（さいきょ）」の呼びかけで、祭りの２週間前の日曜日に地区の広場に集まり、一斉に台締めを行う。台に 12mの台棒を設置し、さらにはしご状に横棒をはわす。その棒にワラを巻くことで保護し、動力部門である台を一日がかりで組み立てる。祭り当日、３か月にわたって製作してきた山車、ザブトン、ツリモン、さらにはあんどんの核となる御神灯を心木を中心にして組み上げる。こうして、高さ６ｍ、長さ 12m、重さ５ｔもの大きさになる夜高あんどんは完成する。

写真１　①竹細工

写真２　②下絵・紙張

写真３　③蝋引き

写真４　④彩色

写真５　台締め

第３節　組織

かつては、子供たちの遊び仲間で始まった夜高あんどんが、次第に担い手が地区の青年団に替わっていった。そして、それぞれの地区でまとめ役が出現することとなった。製作から運営当日までの全ての責任を背負う者として「裁許」、製作の中心となる青年団・若連中のリーダーとして「若頭」があり、３か月間非常に重い役を背負う。現在は、数え 42 歳の初老の者が裁許となっている。また、地区行事の一つであるため、各地区では保存会を形式的に設置しているが、祭りの最高責任者はあくまで裁許である。この裁許制度が

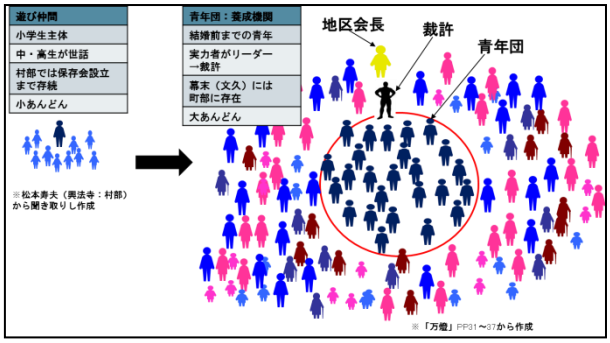

図１　組織の変遷

いつから始まったかの記録を発見することはできなかったが、幕末には大型化したあんどんが出現しており、その際裁許を中心として祭りをけん引していったと言われる。（万灯 PP59 記載）

第４節　前夜祭と祭り当日

祭の前日にはあんどん広場で前夜祭が行われる。前夜祭では、平成３年から開催している小学生による「ちびっこ子供夜高太鼓競演会」が盛大に行われる。日頃、大人たちが製作している傍ら、子供たちも、太鼓、笛の練習を重ね、この時披露する。12 の地区から 30 チームもの子供たちが参加し、バチさばき、笛の音色を競い合う。連日連夜、深夜遅くまで製作に励んでいた大人たちもこの日ばかりはと参加し、束の間の休息をとる。そして、夜が明けると祭り本番となる。３か月にわたって製作したあんどんを日中組み上げ、完成した後、各々一旦着替えのために自宅に帰る。各家庭では、郷土食である「笹モチ」や「笹寿司」、「そうめん」や「うどん」などで腹を満たし、祭りの装束（法被、胸当て、長パッチ、襦袢、地下足袋）に着替え、神棚に自分や家族の安全を願う。そして夜の帳が下りるころ、夜高あんどんに灯がともされ、若連中が町内の神社へ「天下泰平」と「五穀豊穣」を祈願し、各地区をそれぞれ曳き廻す。

写真６　夜高太鼓競演会の様子

そして、津沢の町に次々と夜高あんどんが集まってくる。

若連中 40 人で担いで津沢の町を曳き廻し、「ヨイヨサ―、ヨイヨサ―」と威勢のいい掛け声を連呼し、躍動する様は勇壮であり、雅やかである。また、複数の夜高あんどんが練り歩く様子は、津沢の古い街並みを幻想の世界へと導く。

写真７　あんどん広場での審査の様子

第５節　最大の見どころ　けんかあんどん

津沢あんどん広場において、小学生主体の小あんどんが審査会場に次々に入り、勇壮さを披露する。小さな子供が大人顔負けの格好で、夜高太鼓と囃子を審査員・観客の前で披露する。その後、中あんどんの審査へ続き、午後９時過ぎ、けんかあんどんをするため、広場前の道路（けんか場）の東西に７基の大あんどんが現れる。

両町内の体制が整ったのち、両陣営の中央に総裁許が丸提灯を掲げ、にらみを利かす。「けがをするなよ、精一杯威勢のいいけんかしろよ」と。総裁許が笛を鳴らすと、両陣営は大あんどんを相手目掛けて突進する。自分たちのあんどんを相手のあんどんにぶつけ、力のあらんかぎり壊す。上に入れば、相手のツリモンやザブトンを破壊する。何度も何度もたたきつけ破壊する。逆に下に入ったときは、突き上げて相手の動きを止める。いや、ひっくり返してやるとばかりに上へと押し上げる。そして、相手の戦意がなくなるまで、双方力を出し続ける。総裁許が「止め」と笛を吹くまでこの間２分強。そしてまた元の位置まで戻っ

写真８　けんかあんどんの様子

て、同じことを合計３回繰り返す。３回終わった後、次のけんかまで待機場所へ戻り、壊れたツリモンを取り換え、自分たちの体制を整える。入れ替わるように、次の町内がけんかを始める。これを午前０時まで続ける。夜高あんどんは砺波地方４地区で行われているが、福野、砺波、庄川のけんかとは多少異なり、福野は狭い道路ですれ違いざまに相手のあんどんを人の手や足で破ったり蹴ったりする「寄せ合い」、砺波・庄川は「合わせ」・「突き合わせ」と呼ばれ、正面からぶつけるが、相手のツリモンまで壊すことはない。津沢夜高あんどんの最大の見所はけんかで、ここまで激しく相手の製作したあんどんを壊す祭りはあまり例がなく、全国から訪れる観光客も多い。

津沢夜高あんどんは、二日間にわたって行われる。複数のツリモンを作っているため、15 回ほどのけんかあんどんが行われる。二日目の午前０時になると、最古参である町部の上町、浦町、西町が祭りの終了を意味するシャンシャンを行う。都市祭礼のフィナーレとして、また無事に終わったことを確認するため手締めを行い、それぞれ各町内に戻り、参加者全てで直会（なおらい）と呼ばれる宴席が行われる。ここで、地区の保存会長、裁許、若頭から報告があり、参加者全員で労い、深夜遅くまで親睦を深める。実態調査の際、この直会における面白いローカルルールをいくつか聞いた。一例としては、その年結婚した新婚の者をみんなで祝うため、水をかける禊（みそぎ）の儀式があり、新婚で舞い上がらないよう頭を冷やすためと言われているが、津沢地区独特のものである。（けんかあんどんの部分は北島総裁許に聞き取り）

第２章　夜高あんどんの歴史

次に夜高あんどんの歴史を津沢の歴史とともに、概観してみる。

第１節　江戸初期

年表１　江戸初期

年　号	出来事
1585（天正12年）	利長、越中国の3郡を加増される
1609（慶長14年）	利長、高岡に入城、町民に御車山(曳山)を与える
1638（寛永15年）	石動奉行所設置
1639（寛永16年）	北前船、西回り航路発見
1651（慶安2年）	福野町立
1652（慶安3年）	御勧請（夜高あんどんの起源）
1655（明暦1年）	津沢御蔵建設
1660（万治3年）	津沢町立

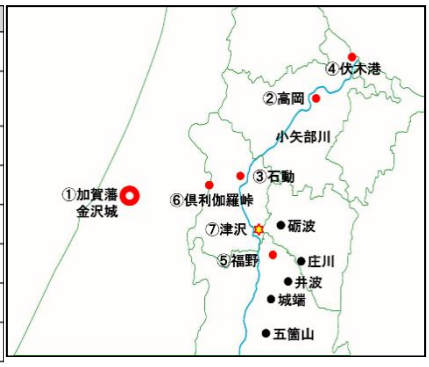

図２　江戸初期の位置関係図

1585 年（天正 12 年）加賀藩２代藩主利長公は津沢を含む越中国の３郡を領地とし、1609 年(慶長 14 年)高岡に入城した。その後、石動町に奉行所が設置され、砺波地域一帯を管轄した。北前船の運営が始まり、津沢を含む砺波地域も開発が進み、小矢部川沿いに福野が造られ、その後、水運、陸路の物流・交通の要衝として津沢に御蔵が建設され、1660 年（万治３年）津沢の町立が行われた。当時は砺波地域の米（藩米）、井波、城端の生糸、紬（つむぎ）、五箇山の塩硝、能登の塩が取引されていた。その後、人々の交流から、田祭りとして夜高あんどんが砺波、庄川、津沢に伝わり、現在まで引き継がれていると言われる。（小矢部市史 PP80、津沢町の誕生 PP102、清水村史 PP231 記載）

第２節　幕末から昭和の市町村合併期

年表２　幕末から合併期

年　号	出　来　事
1862 （文久2年）	高さ11mの大行燈
1873 （明治6年）	地租改正 （水運の衰退の始まり）
1893 （明治26年）	沼田喜三郎、北海道雨竜郡に入植
1922 （大正11年）	加越線（石動～福野）開業
1951～1962 （昭和26～37年）	市町村合併 津沢町→砺中町→小矢部市 （あんどんの休止が相次ぐ）

北前船から全国の文化、風習が伝わって、あんどんは次第に大型化し、豪華絢爛となり、田祭りから都市祭礼[注2]となっていった。1862 年（文久２年）福野町では、16 枚張りの田楽で、高さ 11mの大あんどんを出した。

1873 年（明治６年）に地租改正令が発布されて、米納から金納となり、津沢御蔵が不要となり払い下げられた。また、北海道開拓が奨励されるようになって、津沢からも沼田喜三郎翁（沼田町の開祖）が 18 戸を率いて北海道雨竜郡に入植した。しかし、水運の町として発展してきた津沢は幾度と抵抗したが、時世に抗うこともできず、1922 年（大正 11 年）加越能鉄道加越線（石動 - 福野）が開業したことで、津沢は通過駅の一つとなり衰退への道をたどっていった。

写真９　昭和 10 年西町のあんどん

その後の昭和の大合併で、津沢地区はまたしてもその波にのまれ、昭和 26 年津沢町と水島村、薮波村が合併、続いて昭和 32 年津沢町と西野尻村の一部（興法寺、下川崎、戸久）が合併し砺中町に、最後は昭和 37 年に砺中町と石動町が合併し小矢部市となり、津沢は市の中心部から遠く離れてしまった。

そして、夜高あんどんは次第に地区対抗の意識を帯びたものに変化し、若連中による衝突が頻繁となり、警察が介入するまでになった。また、資金難や人材流出によりあんどんを休止する地区が相次ぎ、次第に執り行われなくなった。（万燈 PP21 記載、小矢部市史 PP402 記載、保存会長沼田氏から聞き取り）

第３節　保存会設立～現在

年表３　保存会設立後から現在

年　号	保存会長	出　来　事
1970 昭和45年	沼田信夫	保存会設立、上町・浦町大あんどんを製作、曳き廻しを行う
1977 昭和52年		消防分遣所竣工 沼田町訪問団来町→伝承
1980 昭和60年	府録四郎	運営委員会設置、田楽行燈を街燈として展示
1991 平成3年		子供太鼓競演会開催
1994 平成6年		小矢部市・沼田町青少年交流事業開始 武者絵製作授業化（中学校）
1997 平成9年	沼田修二	けんかあんどんで初の死亡事故
2001 平成13年	河原豊志	道中曳き廻しで死亡事故
2002 平成14年	川原久俊	市ケーブルテレビ開始
2013 平成24年		三大祭り開催 あんどん会館建設議論始まる
2015 平成28年	沼田信良	となみ野夜高４地区会、リオでＰＲ

昭和 45 年、沼田信夫氏が津沢夜高あんどん保存会を設立し、次いで上町と浦町で大あんどんが製作され、誰もが待ち望んでいた祭りが復活した。他の町内もその流れに追随し、現在の祭りの枠組みへと続いていく。翌年には西町が大あんどんをつくり、津沢の町へ夜高あんどんを曳き廻しに行くようになった。「あんどんがまたできるゆうて、興奮して夜も眠れなんだ。」という当時を偲ぶ古老もいた。復活当初は、時代の波にのまれて町全体の灯が沈んでいた時であったが、最盛期の昭和 60 年になると、第２次ベビーブームの子供たちが成長し、各町内からこぞって参加するようになったことで、総勢 27 基もの夜高あんどんが津沢の町へ曳き廻されるようになった。しかし、次第に児童・生徒数が減少し始めると、参加する町内の運営も苦しくなってきた。そこで、第３代会長府録四郎氏は、数々の施策を実行した。まずは運営委員会を設

置し、企業から寄付金を募って、街燈として田楽行燈を設置し、祭りの観光化を進めた。次にちびっこ夜高太鼓競演会を開催し、さらには中学校で武者絵の授業化を進めていった。また、沼田町へ中学生を派遣し、青少年交流事業をスタートするという次世代の担い手育成事業を行った。このように地区をあげて夜高あんどんを伝承していく動きを進めた。

しかし、平成９年のけんかあんどんで初の死亡事故が発生し、さらに平成 13 年には道中曳き廻し中に死亡事故が発生した。この危機を乗り切るため、第７代会長になった川原久俊氏は夜高あんどんを「津沢の魂」として、積極的に宣伝していった。当時は、ケーブルテレビが市内全域に敷設された時期でもあり、伝統行事として盛んにＰＲを行った。その甲斐あって、平成 17 年に北日本新聞社の地域特別賞を受賞し、また、平成 24 年には市の三大祭[注3]として、クロスランドおやべで、石動地区の獅子舞・曳山と並んで夜高あんどんを出展し、観客を魅了した。現在は第８代会長に沼田信良氏が就き、津沢地区のシンボルとしての夜高あんどんを広く世間に伝えようとさらに精力的に活動したことで、入込客数が年々増加し、現在では４万人が訪れる祭りとなった。（前保存会長川原氏、保存会長　沼田氏に聞き取り）

写真 10　昭和 50 年代の曳き廻しの様子

第３章　夜高あんどんを取り巻く現状

第１節　人口減少による担い手・後継者不足

津沢地区は、富山県の西端の小矢部市南東部に位置し、石動の東南、あいの風とやま鉄道の石動駅から小矢部川沿いに沿って、車で 15 分ほどの場所である。津沢夜高あんどん祭は、毎年６月第一金・土曜日の両日に行われており、その祭りに参加する津沢町部（上町・浦町・中町・西町・古清水の古い５地区）と、散居村に広がるその周辺一帯の村部（小矢部川の左岸に蓑輪・興法寺・下川崎・鴨島の４地区、右岸に清水・新西・西島の３地区）の、合計 12 地区からなる。

津沢地区は２章で説明したように小矢部川の中流域にあり、小矢部川の水運によって発展した町である。また、周辺地域は砺波平野の西端に当たり、主に稲作が行われており、その他には、機織り・製瓦業・はと麦の栽培が僅かに行われている。「明治初年の砺波」によれば、津沢地区の人口は 2,949 人であった。最盛期の昭和 61 年には 4,045 人、現在（平成 28 年）は 3,283 人であり、市が先日公表した人口ビジョンによると、平成 57 年には 2,647 人まで減少すると想定されている。昭和 60

図３　小矢部市図

図４　津沢地区位置図

年代には、12 の町内から大・中・小あんどんが合計 27 基も祭りに参加していたが、現在は 20 基まで減少している。当地区の人口減少により、あんどんの担い手・後継者の減少が現実となってきている。

第２節　夜高あんどんの分析

（１）　各裁許への実態調査

項　目	回　　答
構成員	10代～40代 曳き廻し当日40人程　製作期間５人～20人
運営主体	保存会や若連中（青年団）が中心（30歳前後）
製作開始	２月初旬～３月中旬
製作期間	３ヶ月～４ヶ月
予算	45万円～200万円
財源	祝儀（華代）＋１戸当たり１万円程度の補てん （基金化している団体もあり）
協力団体	児童会の母親や老人会
資材購入	地域の個人商店が中心（中国からLED購入も）
よそ者	親族・縁者のみ（昔は人足行燈の時代もあった）
製作場所	各町内の集会所等１～３カ所に集約 （昔は家の軒先や土間で製作）

表２　実態調査　H28.５実施　20 人の裁許からの回答

表２は平成 28 年５月、あんどん製作中に20 人の裁許に対して行った実態調査の結果をまとめたものである。津沢夜高あんどんは30歳前後の若連中が中心となって、制作期間は２月初旬から祭り当日まで90 日近くの長期に渡っている。また、予算規模は 45 万～200 万円で、祝儀や町内会からの応援金として賄っている。大都市で開催されているようなマスメディアや企業主体のフェスティバルではなく、製作から運営まですべて住民主体で行っており、住民参加型のまちづくりの原点であると考えられる。かつては、若者の養成機関として発展してきた夜高あんどん祭りではあったが、現在は児童会の母親や老人たちも協力団体として製作から参加していることで、老若男女問わず、地区住民全員で地域文化を醸成する環境になっている。また、製作場所は、それぞれの地区で行っており、津沢地区において 18 か所存在していて、６月の祭り当日まで共同で作業することにより独自の交流が育まれている。

（２）主要４団体

	自治振興会・保存会	裁許・若頭・若連中 （青年団）	女性グループ・老人会	市・観光協会
役割	運営・窓口	製作・出演	製作補助	運営補助
当日	会場設営（規制線）	曳き廻し・けんかあんどん	出店	観光案内所
活動	パンフレット 田楽行燈（寄付）展示 前夜祭（太鼓競演会） 保育園の曳き廻し 武者絵コンクール 沼田町青少年交流事業 出向宣伝	出向宣伝 知名度向上アンケート	チラシ	パンフレット
交流・ネットワーク	富山県山（車）・鉾・屋台・行燈祭交流会議 市観光協会	津未希の会（若衆会） となみ野夜高４地区会	松の湯 （集いの場）	富山県山（車）・鉾・屋台・行燈祭交流会議
問題点	組織の硬直化 通年での情報発信 観光拠点	担い手不足 資金難 規制を懸念	賑わい創出 地域の空洞化	学術的資料 観光資源化 人口減抑制 地域振興

表３　津沢地区における主要団体

現在津沢地区には、12 地区以外に祭りに関わる４つの団体が存在する。それを表３にまとめた。裁許等の若者層、地区会長からなる保存会、前２者に属さない女性・老人層、そして小矢部市である。それぞれ得意分野（テリトリー）を持っており、その範囲内で夜高あんどんのため、様々な活動を行っている。また、最近は富山県内で各々交流活動も行っているが、それぞれが抱える問題も異なっていることも分かった。

（３）SWOT 分析

強み：Strength	弱み：Weakness
・あんどんの大きさ、豪華絢爛な装飾、迫力満点のぶつかり合い（全） ・住民主体で、地域文化を醸成、牽引（まちづくりと同時進行）（若・保・女） ・技術・文化等の伝承（若・保） ・リーダー育成システム（若） ・次世代育成制度の展開（保）	・担い手・後継者不足（若・保・女） ・組織の硬直化（若・保・女） ・全国的知名度やブランド力（保） ・少ない歴史的資料（保・市） ・飲食、宿泊、情報発信等のおもてなし（女） ・脆弱なネットワーク（全） ・地域対抗意識（保）
機会：Opportunity	**脅威：Threat**
・集客効果による定期観光バス（保・市） ・土産物・Ｂ級グルメ等の開発（女） ・他団体との交流が近年増加（若・保・女） ・市指定文化財への動き（保・市） ・高速道、新幹線によるアクセス向上（市）	・他の祭りとの競争、棲み分け（若・保） ・高齢化率・人口減少率の上昇（全） ・地域の空洞化（市） ・住民と観光客の評価のズレ（若） ・祭り（フェス化）ブーム埋没のおそれ（保） ・観光イベント化による誇りの喪失（若）

表４ 夜高あんどんＳＷＯＴ分析（若）…裁許・若頭・若連中、（保）…保存会、（女）…女性グループ・老人会、（市）…市

そこで、各地区における 4 団体のキーパーソンを対象に聞き取り調査を行い、その結果をもとに SWOT 分析を行った。

まず「弱み」において、４団体すべてに関連しているのは、地域間のネットワークが脆弱であるということだ。これは夜高あんどんの発展にも由来するが、地域が対抗意識を持っていることにより、祭りを各団体それぞれで運営してきたため、運営のノウハウなど情報の共有もできず、組織が硬直化していると考えられる。また全体としての連携も進まないため、体系的な資料の整備、情報発信力も弱くなるため、全国的な知名度やブランド力が弱いという欠点もある。一方、「強み」については、各地区で夜高あんどんを通じてまちづくりを行っており、技術や文化等の伝承、リーダーや次世代の育成も行ってきた。これらはすべてシステム化されており、夜高あんどんの成熟した強みとなっている。

「脅威」については、他地区の祭りが外部要因として影響していると考えられる。その外部要因である祭り（フェス化）ブームに埋没するおそれや、観光イベント化により誇りを喪失する懸念があるということは、祭りのアイデンティティが現在揺らいでいる状態であり、それにより、地域の空洞化へ繋がる可能性がある。逆に「機会」については、津沢夜高あんどんの優位性をさらに進展させるために利用していかなければならない。例えば高速道や新幹線によるアクセス向上や定期観光バス、さらに土産物やＢ級グルメ等の開発がある。また市指定文化財への登録は祭り自体の学術的な裏付けとなり、確固たるアイデンティティとなる。

これらを取りまとめると、成熟したシステムを持つ各団体間の連携を促す機能、すなわち、誰でも集い、情報を共有できる機能、並びに夜高あんどんのアイデンティティ維持のためのシンボルとしての機能、そして、夜高あんどんの優位性をさらに進展するための組織的な活動拠点として、あんどん会館が必要と考える。

第４章　あんどん会館建設　～目指すべき会館像～

写真 11　旧消防分遣所

以上の分析をもとに、あんどん会館建設に際しての方向性を考察する。序章でも述べたが、市は現在、あんどん会館の建設事業を進めている。具体的な内容については現在も協議中であり、平成 29 年度に基本設計を行う予定である。また、これまで述べてきたように、主要４団体それぞれが夜高あんどんに対し精力的に活動してきたが、各団体の抱える問題が異なっており、連携することがなかったため、組織的・計画的な行動は無かった。そのため、最優先にすべきは各団体間の意識を統一して、連携を図ることである。手法としてはアンケートによる意識調査やワークショップがあり、各々が抱いている夜高あんどんへの思いを客観的に集約することによって、各団体間の連携が図られる。現時点でも、もはや個人・団体単独で対応できないことも発生しており、建設委員会の設置は連携・ネットワーク問題の解決の一歩と言えよう。集約の結果により、施設を新築するのではなく、既存の消防分遣所を改修することにより、支出金額を抑えるのも選択肢の一つである。つまり、必要最小限の展示や資料の整備ができるよう既存施設のリフォームを施し、その分他団体との交流事業のようなソフト事業を充実することも可能である。また、これまでの考察の結果、誰でも集い、情報を共有でき、夜高あんどんのアイデンティティを維持し、そして、組織的な活動ができるような施設としてのあんどん会館が必要であると考えられるので、限られた時間ではあるが、まずは各団体が連携し、議論を尽くすべきである。

むすびに

本論文ではこれまで、津沢地区の夜高あんどん祭りの概要、組織、歴史、建設委員会について述べてきたが、いずれもあんどんの魅力の一端であると言えよう。かつて、観光客にインタビューした時、「すごく大きい」、「細工が綺麗」、「けんかの迫力がすごい」と目を輝かせて語った。また、若連中や地区住民にも聞いたところ、「今年のけんかは良かった」、「製作は大変だったけど、あんどんが終わってすっきりした」、「津沢の正月みたいなもの」と祭りの醍醐味を堪能していた。

「祭り」とは誰にとっても、誇りであり、先人たちとのつながりでもある。津沢地区民にとって夜高あんどんとは、ヒト、モノ、歴史それらすべてがかけ合わさった魅力、地域資源であり、かけがえのない「魂」となっていることが分かった。今回の会館建設を契機にこれからの夜高あんどんを語るための場を津沢地区民全員で作り上げていくことによって、祭りの保存・伝承、そして、様々な問題解決の糸口を導き出せるのではないだろうか。

先人から受け継ぐ思いは誇りとして確実に受け継がれており、一歩一歩地に足をつけて進んでいる。そして、この誇りを未来へと繋ぐため、またより多くの人に発信するために、誰でも集える場、シンボルを作っていかなければならない。

決して一朝一夕で進展するわけではないが、新たな津沢のまちづくりの兆しが芽生えて

いる今、数々の困難を乗り越えてきた津沢地区民は一丸となって前進するに違いない。そして、近い将来この遺伝子を引き継いだ子供たちがさらに発展させ、継続していくことを願ってまとめとしたい。

参考文献

・小矢部市史編集委員会編（2002）『小矢部市史』小矢部市.

・中島光正編（1999）『津沢町の誕生』(津沢歴史研究会叢書)中島光正.

・清水村史編集委員会編(2006)『拓け行く清水野：清水村史』小矢部市.

・長岡一忠（1970）『福野の夜高雑考』長岡一忠.

・福野夜高行燈保存会福野夜高 350 年記念事業推進実行委員会編（2003）「万燈：福野夜高三五〇年記念誌」福野夜高保存会福野夜高 350 周年記念事業推進実行委員会.

・宮田登・小松和彦監修（2016）『青森ねぶた誌増補版』青森市.

・聞き取り　平成 28 年 10 月 27 日津沢児童育成会：三輪由紀夫、11 月 9 日商工会青年部：雄川泰成、浦町：西田泰三、10 日上町：三輪弘之、11 日西町：沼田好央、13 日蓑輪：川原一浩、14 日清水：折田泰洋、興法寺：松本壽夫、15 日鴨島：森川外茂男、商工会女性部：小松良江、保存会：府録弘之、沼田清、16 日新西：黒川岩男、17 日総裁許：北島英雄、となみ野夜高 4 地区会：宮窪大作、21 日中学校教頭：沼田勉、24 日ビデオクラブ：沢田久雄、26 日中町：中村悦子、上町：小幡正昭、12 月 6 日保存会長：沼田信良、商工会：村政司、美香、 9 日商工会：沼田正敏、13 日前保存会長：川原久俊、14 日市観光振興課、15 日市生涯学習文化課

・表１写真　北日本新聞.大あんどんぶつかり合う　津沢夜高祭開幕. 2016-6-3,http://webun.jp/item/7281593,
北日本新聞.夜空に行燈、熱気呼ぶ　福野夜高祭が開幕.2016-5-2,http://webun.jp/item/7273233,
北日本新聞.となみ夜高まつり開幕　行燈２１基鮮やか.2016-6-10,http://webun.jp/item/7283832,
北日本新聞.行燈鮮やか、ぶつけ合い激しく　庄川観光祭.2016-6-4,http://webun.jp/item/7283832,

・写真４　北日本新聞.大あんどんの宝船に色塗り　津沢観光協会が初の体験イベント.2016-5-22,
http://webun.jp/item/7278541,

・写真６　北日本新聞.小学生が太鼓競演会　津沢夜高あんどん祭前夜祭.2016-6-2,http://webun.jp/item/7281593,

・写真７　北日本新聞.大あんどんぶつかり合う　津沢夜高祭開幕.2016-6-3,http://webun.jp/item/7281930

(参照日はすべて 2016-7-2)

注１）富山県まちの未来創造モデル事業制度とは市町村の総合戦略に基づき、市町村が多様な主体と連携し実施するまちづくりなど、人口減少対策（自然増・社会増）の取組を支援する制度で①地域の特色、強みを活かした、人口減少対策に向けたソフト事業、②①と一体となって特に大きな効果が見込める施設整備等のハード事業が補助対象であり、補助率／限度額は知事特任でソフト：県 1/2　400 万円、ハード：県 1/2　4,000 万円である。

注２）都市祭礼化の流れについては青森ねぶた誌増補版第 1 章第 2 節「都市祭りとしての青森ねぶた」を参照

注３）小矢部市三大祭は石動地区の曳山祭り、市内 84 地区で行われる獅子舞祭り、そして津沢夜高あんどん祭りである。